

那覇港国際クルーズ拠点整備事業起工式を開催 No.7

～「東洋のカリブ構想」実現へ 那覇港が官民連携による国際クルーズ拠点形成に向けた第一歩を踏み出す～



【開発建設部】

▶ 事業の背景

沖縄を訪れる観光客数が好調に推移する中、那覇港へのクルーズ船の寄港需要も年々高まりを見せており、平成30年の寄港回数は243回と全国港別寄港回数で第2位となるなど、国内有数のクルーズ船寄港地へと発展してきました。

一方、船舶の大型化や現在、複数のクルーズ船が同時寄港する際は、やむを得ず貨物岸壁で受け入れており、旅客の安全性や円滑なCIQ（税関・入出国審査・検疫）手続き、さらには大型バスやタクシーなどの二次交通待機場の不足といった課題が指摘されていました。



貨物岸壁に着岸するクルーズ船



貨物岸壁ゲート前で入構待ちの大型バス



悪天候の中、岸壁上を移動するクルーズ旅客



▶ 那覇港国際クルーズ拠点整備事業

このような中、平成31年4月、那覇港は国土交通大臣から「国際旅客船拠点形成港湾」に指定され、港湾管理者の那覇港管理組合と世界有数のクルーズ船社、MCS クルーズ社(以下 MSC)、ロイヤル・カリビアン・クルーズ社(以下 RCL)が連携して、国際クルーズ拠点形成に向けた取り組みをスタートしました。本事業では、新港ふ頭地区において、世界最大級22万トン級のクルーズ船に対応する岸壁、泊地などを国が、駐車場などを那覇港管理組合が、ターミナルビルを MSC、RCL が整備します。これにより、22万トン級のクルーズ船受け入れや複数船舶の同時寄港の際の安全かつ安定した受け入れが可能となり、旅客移動時の安全性や CIQ 手続きの効率化、さらには円滑な二次交通へのアクセスなど旅客の利便性が向上します。また、連携船社には岸壁の優先的な使用が認められ、官民一体となつた取り組みにより、更なる観光振興が期待されます。

▶ 起工式の概要

11月10日(日)、赤羽一嘉国土交通大臣や地元選出議員の他、MSC 及び RCL など多くの関係者や来賓が出席し、内閣府 沖縄総合事務局と那覇港管理組合の共催で「那覇港国際クルーズ拠点整備事業」の起工式が開催されました。

赤羽大臣は「地理的優位性と豊富な観光資源を活かし、国内及び東アジア地域有数のクルーズ船寄港地となっている那覇港において、本事業は沖縄県が掲げる『東洋のカリブ構想』実現に向けて大きな一步であり、令和4年春の供用を目指して、しっかりと取り組んでいく」旨、挨拶を述べられました。また、衛藤晟一内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方対策担当)の挨拶を原宏彰内閣府沖縄振興局長が代読し、「大きなポテンシャルを有する那覇港において、世界有数のクルーズ船社2社が優先使用権を活かし、歴史・文化・自然・食など、沖縄の魅力を存分に堪能できる素晴らしいクルーズツアーリーに繋げ、世界各地からのクルーズ客の集客に大きく貢献するものと期待している。内閣府として那覇空港第2滑走路を含め、港湾・空港の整備をしっかりと進め、沖縄の振興に全力を尽くす。」と述べられました。



赤羽国土交通大臣



原沖縄振興局長



記念撮影